独

吟

聯

28 29

Ш 竇里

赬 重扇

紫△ このてがしばは扇をかさぬあけ紫にしたたる木の実

巴

111 桕儼

になったり、 お前の恋人のあの女中さんのことなのかい。 はには、山 一の木の実にかこつけたのはいいが、それがお松さんだったか、いやお竹さん、 ああやっぱりそうだったのかい。 おやおや、 聞いたとたんに領が赤くなったり紫

山の木の実がうなだれて、

赤くなったり紫になったり、

先生は神女としっぽり……というのもご自由ですが、

小石を相手に何をしゃべれとおっしゃるのですか。

石

の相手をさせておいて、

巴童

「わたこけをまとった

なさろうとは、平生の先生に似あ 巴童ついやなことをおっしゃいますね。文学談義のさいちゅうに探偵みたいな身上請 いませんし

を贈った。それに対する返しの作中の句だ。花のさき乱れるさまを歌って、あかとむらされ水駮、雲錦あい凌乱すしという。中喜郎の劉絵が琵琶峽に入り、横布磯をなが必て作った詩 では文学敬義にかえろう。南斉の謝脒に「劉中書に和すしという詩があって「頼紫ともに

9-001

可哀そつに

わたしに川

501

鄙の女がやきもちやいているみたい

でにここまで表現をデフォルメレえたのには敬服するが、お前のことばを詩にするなら、 もよくきいては 生门 に対する自賛のようです。あそこにそよぐかわいらしい枝、わたしには柏と見えるもの 「ずめ「山実垂赬紫」だわ。一句で謝脱 巴童 沈尚書に呈 いかめ |「たいそうなほめかたですが、先生のはどうやらわたしの思いつきよ すしる詩に「豪李は朱 い重ね弱とごらんになって、ひとりで悦に入られることでしょう。いつか先 いるが、 お前の 山の木の実に

は及ばないね。

同じ詩人が

つ郡に

在 実を の二句に相当する。いや超越する奇趣があ **沈め、**秋藕 コ 軽 糸を折るしという。三百 リ、ご自 年以 リて病に る。 前 にす \bigcirc 502

重弱にというのはどうだ。 巴童「山実の句には贅がつきました。小柏にも注を加えていただきますか」 いところをつっかれるとお返しも鋭くなるよ。だがそれでお前の句はできた。「川柏

よって不幸な晩年を送った。「昭聖観」と題する作がある。 を
同人と
つ
に
理解
で
き
た
希
有
の
か
た
だ
っ
た
が
、 なるのも一興だろう。玄宗 は弟子末輩 家渓口 玉女玄元に侍せり。扶植は尽く蟠木、歩櫚に多く画緒。新松天穎を引き、小柏山樊 に隐れ、微路花源に入る。数日青閣に朝し、彩雲なお門に在り。双楼 一が師の 説につけるものだが、お前はきょうは、神仙 の世の詩人に儲光羲というひとがいた。農民 安禄山の変で賊にと今之づれ、乱後その罪に ッ だ か ら、 の苦しみと喜び わたし 一殿を が、

9-002

注

を続る。そぞろに弄す竹陰の遠きを、けくりく随う渓水の喧しきに。石池は春色を弁じ 獣は人言を知る。未だ逐わず鳳凰の去るを、真宮にこの蒙に在り、

さわしいだろうじゃないか。『礼記』の曲礼に「敬せざるなかれ、儀として思うがごとくな けたこのてがしわに「小柏」の語をあてておくのは田園を쑳する詩人に対する敬意としてふよく見つけた人の視線が感じられる。山樊(やまかげ)をめぐるわたしたちが、そこで見つ のパチクリした目つきは。韓退之先生が李翊とのに答えた手紙に「儼乎としてそれ思つがご とく、荒乎としてそれ迷うがごとし」と書かれたが、いまのお前は、まさに茫乎として迷う 一という。山実の緘紫の不躾に与えるにまさに適切なのがこの「儼」さ。なんだお前のそ これはむしろ王섍の宮廷詩ないし寺観遊ら詩に近いというべきだろうが、さすがに自然を

ってもやけり儒生なのですね。古典主義も結構ですが、はつらつと創造する気魄に欠ける気 巴童「先生はさすがに奉礼郎、おやめになっても礼につるさく、孔子はすかめとおっしゃ

だしきでし

そつ来るだろうど思った。小人の浅はかさだ。『老子』にいう。 るろがごとく、儼兮としてそれ客たるがごとく、渙兮として氷のまさに釈けんどするか ごとく、敦兮としてそれ僕のごとく、曠兮としてそれ谷のごとく、混兮としてそれ濁れ 故に強いてこれが容をなさん。予兮として冬に川を涉るがごとく、衝兮として四隣を畏 古の善く士たる者は微妙玄通にして、深きこと識るべからず。それただ識るべからず、

それただ盈たず、故によく敲うて新たに成さざるなり。 るがごとし。たれかよく濁れるをもってこれを靜かにし徐ろに清 く安んじてもってこれを動かし徐ろに生あらしめん。この道を保つ者は盈つるを欲せず。 からしめん。たれ かよ

だがまあ喋句は付合がかんじん、あとけお前のことばどつり、まってらの「重扇」だ。この 新 **儼兮として客のごとくにおのれの目をととのえてむかえげ、ものみな新鮮に見えてくる。** しいものばかり追っかける者は、身近かな見ふるしたものの たぶん、古人で用いたひ と

に

ある

まい

。 中にある新 しさに気 ブかな

先生の 銽ですし 4,2 ベリ好きの轉退之先生でもうんざりなさるとうかがいましたが、いや、 **壺「ちょっと講義をお願い** したら、国子祭酒とのの訓辞みたいに長くなりました。 まったく……さて

肥松突丹鷺 松肥之てやにぞ噴き出づ

30

賀

て声さわゆかにひびくのさ、 肥 巴重「肥松はわかりますが、 ス に松からは琥 珀 \bigcirc よつな樹脂が突出 樹脂を丹髄とは何か故事でもあるのですかし たくま L 流れは障害にあえばいよい · よ 走

晋の許詢の句に「青松に素髄は気り

秋菊は芳英を落せりしという。『列仙伝

しには

八

9-004

504

るまい 木 砂の液を たなま岩 づけて飛 精中の木精はとうぜん丹砂とむすばれる。 「竜虎経」にいう「丹髄は流れて汞となる。 11 松 には 脂 11 Lという。 を軽くし年を延ぶしという。つ ればならめ、 名紅 は 渴 1 いうなりしわが仙山の松脂を「丹鼈」と表現するのけ、 節芝というしこの駅芝を緊脂とする本もあるから松脂なのだろう。『本草』 Ø. 変身のすばやさ 隧 61 珠 府 安物だ。 松脂地中に淪入すること千年、化して茯苓となり、千年、化 西に出でて膠 ť, にあ Lという。 これらの記述からみても い道士を罵倒していらっしゃろ先生だのに、 **—**1 抱朴 たつて木正た 丹と「丹砂、 腊 子しには「松の三千歳なるものは皮中に聚芝の竜形の、木正なり、常に松脂を食い、みずから石室を作る。 晒 出身のわたしがうたう古むの宝脂は、膠のごとく紅珠のごときも のこときもの善きなり・ 端睨すべからざるものがあります。その調子なら、 **飞易参同** 異物 契しに「 松 許詢のうたった素盤すなわち白い松 丹砂 脂は 名 皮中に象芝の竜形のごときあ と木精と金を得て
并さる とつぜん逆士になられた 松 肪 まさしく自然というほ 味芸温に L T 周 琥珀となる。 して
スし まも の武王 レとい に ~服 17 74 脂 かあ 11 円 虎 す 名 9-005 505

が自然に たしかにわたしは道士を批判する。 迷信を鼓 学んて. 吹 世の民に大地と共に生きるわざを教えてきたのが、 権力と結 んで、 だがそれは、かれらが老荘の教えに学びながら古道を おの れの利得を求め るに汲 々た ろからだ。 わが国の古仙 隐 の道だ。 途

んになられるでしょうし

学がふ ぶないところでかれの感性が、年寄りの冷や水、およしなさい、 利 鏡に写った 用しようとした。権 教に いや頑固で **りかざす顔** 生きかにからそのことが推 して お ŧ (T) れの姿をうめぼれで描き直しはしなかった。 おそらくは ある の 力 がりえに美をはっきりと見わけ得たキチがイだ。当時 行孔子』だ。古道に憑かれてさまよい歩いたあの老人は Ø じめ たくみな論理に けこのような古道とさほと隔 測でさる。わたしが孔 あ のじいさんは何度かころり 子を好か ר ר: と袖をひいた。じい めというのは ものでは とい なかっただ の権 きかけ 頑 権 直で カロ かれを コ

れることを飲り となるとき、正しい道がかえって奇怪とされる。達人はそれをよくわきまえて、奇怪 すべては権力と結びつくとき堕落して奇怪なものとなる, す. 4 ずから奇古と称 してそこに安んじるのだ。 仏教 とて同様だろう。 奇 とよば 怪 が常

のことを詰 しっているから、 奇古といえば、お前 してやろう。引き出 間 もなく坊主になるだろうと冷かしたりもするのだろう。すこしあのお経 は、わたしがいつも机の上においている楞伽 したのがお前だ、 聞く義務 がある 経をしっているだろう。

儋州 (海 悪魔のことさ。 おそろしい国だろう。楞伽経のはじめに、次のように描 天竺の南に、 南島) 夜叉の王をラーヴァナという。 があるようなものさ、その島はむかしから夜叉の住む国とされた。 大洋を隔てて島 がある。その島の名が楞伽だ。わが国 夜叉王ラ いている。 ーヴァナの領する楞 の広州 加国は から海を隔 夜叉とは

かくのごとくわれ間付り。

あるとき、婆伽婆、

大海の畔なろ摩羅耶山の

頂上、

楞伽

城

外明 発す、 百千 風 にとどまりたもう。かの山は種種の宝性の成ずるところ、諸宝間錯 吹撃し枝を揺がし葉を動かせば、百千の妙香一時に流布し、 献 の日 重巖屈 **(7)** 金 日月の光 一曲し、 山を照曜するがごとし、 暉もま 処処に た現ずる能り みな仙堂霊室龕窟あり。 また ず 無量の花園香 無数衆宝の成ずるところにして、内 樹 1) 百千の妙音一時にともに 74 な宝 し光明赫 杳 林 変として、 觥

夜叉の目 婆伽婆」は梵語の音訳で、 みなこれ古旨の諸仙賢聖の、 とはおかしなことだ。さらにおかしいのは、 わが国のことばに直せば「世尊」だ。このように美しい処 如実の法を思いて得道せし処なり。 つづいて次のようにいうことだ。

17 古昔の諸仙賢聖が、なぜ夜又国で、 お か まいなく、 ラー ヴァナの請 いによって釈尊がそこにおも 如実の法を思うて道を得たのか。 むき だがそのようなこと

スしの城にUたとおもうおのれがもとの宮殿にUて、 世尊はラーヴァナ夜叉王のために法を説き、また神通力によって、まぼろ 大比 既 衆は 丘僧と大菩薩衆と、 みな幻 城に入って仏の教えを聴き、 みな種種他方の仏土よりともに来って集会す。 おりると幻は消 他のものが見えなくなったのをみて疑 沨 する。 ラ ーブァ \bigcirc 楞 ナ
け
ま
ぼ 加 城

さきに見たるは誰 かなせる。説法者を誰とかなす。 これ誰にしてか帳問 せる。 わが見り 間をいだく。

孭

にはじまる、えんえんとつブく疑問は ところは何の法にして、これらの事あ **私原の「天間」を思わせる。** りしや。…… さてラ ーヴァナは更に

乏

代っ を貪るによって ように あって 問 ŧ 勇 捨 Ž してラ 猛 ててて もろ 精 進し、 がこれに ーヴァナの **(7)** 仏と僧 五箚 仏国土、 身を鍼虎 とに 相 縟 心に生じる疑問を聴聞 お して 漇 よび L 解 山林 師 もス 脫 · 子 **(7)** もろの 1. 期 羅 なさを念 入って出家 刹 17 国 投じ 王 者の上首である大慧菩薩 (1 0 公学道 7 身 すな け ŧ するを見 熈 わち 常 7 17 14 国 道至 る 士 また 求 宫殿 王位 U 仏子の が察し、 るを見 妻安 Ш 林 中

天 11 笠の 楞 たもので「入楞伽経」十巻。 II 伽 国 求ぐで #t 経 不天竺の菩提派され那阪陀羅が海上 0 那な訳 破ぎし n 陀だた が国 15 れは今は残っておらぬ。第二は 訳 された 支し上 か が、 ら来 ŧ 11 錬の 朝 のに回つある。 わたし 延昌二 金陵 年(0 道場 第一 五一三 一寺で訳 IJ 劉 今から約四 はこの本だ。 末 洛陽 した。 の元 Ø 嘉二十年 汝南 _ 枒 百年前に 王の 加 阿 宅と郭 跋 多 Ш 中 -天竺の曇 羅 三に 郁 宝 (V) 経 金華 10 Щ 17 . 巻だ. 508 9-008

(1

14

答

えることによって、

100

絰

17

進行

する

もさまざま 至の 人が夜 の特異な 叉 中 說 の夜 詁 をもっているが、 叉と忌み きらうラー わ **が**` ブア 国 $\langle T \rangle$ ナ 訍 0) 本に 請 じによっ ŧ 種 棰 7 0 伝 說 かれ 說 が ま *T*: この つわ 終 リす 天空で

則天

活

后

0

ス

視

元

年

0 40

0

ン浴

陽

Ø

Ξ

陽

言で

訳

長安回

年

Ł

O

回じに

成

第四は

于

闆

0

実

叉

難

吃

の家に

あ

るの

訳

入

伽

经

山七卷。

武

后の

 \neg

御

製の

序

_

がつい

7

いる・

とひとの関 の本 はそ (T) 訳 心 者 \Diamond が楞 墨 緂 無 ゔ 伽 かを閉 諡 経 によ は天竺から西 1} IÍ 7 金 l ろ 田 域 経 のクッ に
つつっ
た 4 7 に出、 今日では、 晋の義熙八 傳說 もほ 苹 とん 四 ど忘 れ去 17 敦 煌

概 謸 **(7)** 当時 よって 天 が 0 楞 7, 沮 ○意 加 渠 敦煌をせめ 神通力を有した 蒙遜 経 西 敦煌乏郁 を訳 域 祖 諸 の保 17 した 国を傘下におさめえたが、 あたる。 護 として かが **(7)** をつけ、 け 西 T: 1) 墨 87 涼 無 T 涅槃経 識 王の菩提をとぶらい 西 0 王の 17 涼 コス 17 数 西 政治 涼 年 第二代の王の ٠. 金光 国 滞 で、王 顔 在 問 のちしば 明 した となり 经 . 仏 11 9 自 5、 その þή かねてその しば 殺 国の で 行 建 Y /国者 滅亡 西 至宝 讃などを訳し 奴 バ 涼 一と仰が 王の怨霊に した。 0 16 李霱、 您噩を調 中 国 17 11: 17 T; たっか 吏 涼 わ 1大 なやま 王 ... する II t tt 0 涼 面 され たこ 17 涼 17 め 圣 玄 僧 妨 汳 17 す

とおそ のだ ŧ また 刺客の手で、 和二年 消 1t 息をたっ 涼 涅槃 <u>-</u> 王 Ш 17 経 三二)魏 た。 曇無 旅 0 完 先で殺させた。 全 牆 の王の な原本を求めることを理 グ 魏 1 拓跋 17 17 その年のうちに、 寿は 17 **100** JŁ 源に Ø T: βŊ 対 由 17 し曇無識 に曇無誠を天竺に 諔 っ て 殺させに北 1t を求めた。 涼を 涼王も死に、 湫 すことに 7 むかっ Ø 通力 τ なる 旅 17 楞 立 目を カゝ 加 J 経 7 t 17 貆

たと

いう。

Tj 重 西 徳で助かったという話は 涼 がこれに 王 われ \bigcirc 子の李重 関 わ ţ リをも とも 耳 17 流 っ 布 T: 国 よく知られ とい グ l T 冱 う んだとき、逃れて末に 大師 伝 ヤ 7 が Ł Į, i 中 あ ろ。 ろが、 国に 来 7 確 仕えた。 第二の 四 五隻法難に连った 办 では ない。この か" 卷本 本 17 小 達 0 熔 鴻 经 され 大 0 ÉM 不 3 グ 甩 ۷

+ 卷本 が飜訳さ 11 たころ、 重 目 Ø 子の李 ee II 魏 に仕えて金門の 鎮 将 だっ *T*:

金

F9

Ŧ

509

お T: 伽 経 経 0 秦王 この 第一 十巻を二部うつさ か 肼 卷玄 持 あ 代 (V) 経 士 胸に 太 ガ 1) 宗 淮 速 あて が兄 安王(李神 < ~; È. 7 0 ر الح 祈 太 7 子 たので 建成 狺 通 コ ₹ お 17 Ø 祖 ÀŃ ক্ 命をとりとめ 伝 父の も 宴 わっっ 知 進 7 7 *T*= τ 鸾 福 , 酒 0 T ることだ。こ 17 淮 安 め寺に た あ たっ 王
は とも 寄 たとき、 いくたび 伝える 進 (Z) 人 か 淮 が 部 安 死 新 王 地 圣 T: Ž か 持 扶 経 经 訳 17 な 7 がら て 1 L 7 T: 膈 家 生 爱

T; 后 討った。 淮 その 与之 安王 17 唐の か 4 心な 皇室 Ø け ち冥 話 ٽ. 4 \bigcirc 吴 終に、まだ幼 ずも討 復 国 国 類を名として 公 施 公 忕 17 17 っ て 武 オ 能主 流 承 殺し 大村 刷司 11 、第十一 5 見 武 *T*: 出 \bigcirc した 后に ଚ 徐 **儋州へ 洒南** 敬業 男の 經 対 $\langle \rangle$ 1= して及 のた 17 吳囯 あ 11 島)に 1 = . 人も 公(李孝逸)の 亙 乱 徒 知 した徐敬業 图 ح 呉国公はこ6等し るように 徙 1 されてそこで死 奼 行く 罪に ₹. 唐 (T) 末を あて 泔 天 子で 后 経至 5 0 案じて、 ক ń ゴ L よう な 7: 楊 1= 州 よって < ニの とし \bigcirc 則 寺 天 经 13 T 具 武 Ź 国 寄 か 后 手が 進 it

ととの 前 豀 国公 父上 17 之 揚 僧 の子孫 ナこ 州 とき船 14 読 17 堂 経 お から下るき僧を追うて 0 ら 17 かた 0 請 \bigcirc 5 方に 都 Ø: が、 合 回向 で出 流 絽 惠 発 文 介する パが数日 17 呉 苦 人が 国 鑵 ₹ Ø め 公 L 0 U た。わた あって蜀 た、その 理 名 Ē 由 をた 誦 L で す 所 ずね の父 るの 仕事につくことに 在 T: 玄聞 上は なさにふとおとずわた寺で、 さと 昗 囲 公 らめた。 0 なっ 畠 行 孫 Τ-昗 17 Ö あ お व T で!こ る。 ι, -+ ゃ 旅 せ枯

師 ろ人 僧 17 Ш で得 か 当時1.16 ずけ T: Ш 安 ₹. 禄 17 Ш 楞 加 **(7)** 变で 经 口 嵩 たい Ш を去 7 // 流 四 涉 浪 本 を読 の 末この寺に来た。 誦 たが、 この

おそらく具 寺 げるほうが、この ŧ *T*-まに あ L る 幾たびか兵 の命をながらえさせたのであろう。読む いはつどう岩 国 公の霊が夜叉王となって、これを子孫なるそなたの手に伝えようとして、今ま 経 のあ 火に い僧たちは りかたとして安らかであろう。そういって老僧はこの あったが、 この経を安置 だがその不思 一議に 僧の した建物は おらめ 気づかず、 寺におくよ 災禍をまめ この楞伽 Í, かれ を読もうとせ そなたにさしあ た。この寺に 経本を父上に 好

された、 なっ 父上は とって来られた。呉国公が流されたとき、 蜀 わたしが父上からのこされたものとしてはこの『犬楞伽経』+卷一部の Ė 门 き、ナン 17 西 の 国 境 地 帯に 靭 貈 L 家族 わ t: もまた疾 L \bigcirc 生 17 民におとされ、財産 る 前 後 にけ 7 と 陜 みだとい 県 17 \bigcirc 没收 令 と 511

だから、 ほとんどみな殺 はもつー そうら 理由 童一 した 高僧が草稿をつくり、学士のたれかが修 本あった。 先生の ま 17 なぜこの 書いてない。武后は も思っていなかったろう。 しにした。かつての それなら お宅にとって 飜 武后 訳をさせ の序 わ T: T: 17 のある七巻本だ。 L 楞伽 かの がしい 天子となるために ま坊 夫の李氏 表だっ 経はずいぶん 主 17 t: 建て なる太宗が教えておいたことだ。武后としてロ なった 序は まえ 自分の生んだ子を殺し、 飾 なかなかりっ ロかか ところで し、署名だけが武后 17 リが 言 してあっ 不 深 思議 11 ぱな文章だ。たぶ のですね 7 コ ŧ かい。 0 彼 女 御製な 皇室李氏 0 ところで 心 のだ 情 L \bigcirc (7) ろう。 うちが 一族玄 楞 仂

どもが出てこめように封じこめてしまおうというのが. か 、 分 が 女の殺した一切がっさいの霊をなぐさめる、もっとてっとりばやくいえば、 のれに ŧ 女傑 仕えてくれた呉国公の怨霊をしばしば見るようになった。その呉 も死に際に近づくといくらか気弱くなるのだろ 新訳事業のまことの理由だったとこ うか。 魯の 皇族で 調 あり 国公 伏 して ながらに

楞伽国に入る、と名づけられたか、この経がなぜ生まれたか、そのことを端 そのものが宗 さとばすほどには強靱だったが、異民 あそこなのだ。武 ない。わたしがごきに暗誦してみせた楞伽国の美景の描写が七巻本には抜けている。 ひきつけられたに もあすこは四巻本にもない、四 この経を読 怨霊口、それを見る人の心がつくりだすのだ、と楞伽経が説いている。彼 して の原本になかった、といえばそれまでだ。だが七巻本は「五つの梵本を詳かに 死後にゆく国にこてふさわしい。怨霊ともにやることはない」と削らせたのだ。 な二の経 耐えた人たちが、支配と被 んでいたら、そんなことは 教 の索引にすぎないのだから。だが生きた宗教は骨ではない。この 后は、 のパトスをすくいとるほどには博大ではない。「こんなに 違いない。だが惜しむべし、 あそこはたしかに読んでいる。 巻本は楞加経 支 西飞 族 わかっていた の対立を超越 の植民地となった祖国の中の異国で の骨だ。教義学にはそれでよいだろう。 很 女の論理し、 け して ずだ、まったく読 彼女は直観の鋭い女だから、奇妙に その超越をさえ夢として笑う、 政治屋や学者 まなかったわ 美 みずから の 的に物 女がじっさいに 理 しい風 豆 经 語 か るの を夜叉 ŧ 人ぞ 教 吹

9-012

どこでとなぜがけしおってある。武后は、おのれの殺した。夜叉〟たちのために訳させておとは、ある程度の量をもつ経典なら、くわしく説明してあるものだ。ところが、七巻本では きながら、夜叉国の美景を削った、そこがいかにもぜいたく好きの女帝らしいところだ。い 天竺の人が侵略し収奪して露岩齊土の国とかえ、その土地の人を夜叉と呼んでいやしめた 之そな之比較討究しているのだ。いつ、とこで、だれが、だれに、なにを、なぜ、というこ 二つの漢文訳本を勘案し、そのよきところをとり、あやまれるところを正してし完成したの ばかりではない。もともと楞伽そのものが、華樹宝玉にみちた楽土であったのを、 関係 した法蔵が書いている。つまり、四巻、七巻、十巻の、さらに他の梵本さ

すか。驚いたな。それじゃあお釈迦さまも悪党なのかもしれませんわ 天竺、と一口にいっても、土地は広く、国は多く、人種もあまただ。釈尊の生国は 「夜叉だと思っていたラーヴァナが髻人で、仏 の国と思っていた天竺が侵略者なので わが国

だ。夜叉なら、それを討ち、そこから奪うことも、。正義《ということになるだろうからな

の一州ほどもない小国で、バラモンたちとは人種もちがっていたらしい。早くに滅ぼされ ということだ 巴童「<奇怪が常とされるとき、正しい道がかえって奇怪とされる>とさっきおっしゃ

ましたが、なろほとお話をきくと奇怪なことのほうがいいみたいですわ その判断にも危険はあろ。達人の奇古の風趣を、めぎかえ自在の衣裳のように、 物がいる。そういう連中が、怪奇を趣味とする。いまの道士はおおむわ「ぐろてす 身につけ

0 セ ル スマンだが、 学者 や文人にも、 似たやつがどっさりいる。 うぶな少年に 17

重 飺 引 **と怪** Ш がとび出 きら っ 111 草木 声に かがやく穂のうねは、 11 や驚いた。 0 もみな説法、と、これも先生の 見 出して教えてくださったことが して、ごうごうと鳴り 天 わ 女 17 **(7)** がつかめ。 うたう大合唱でしょうか。 やせた先生が 切 ひびく。 来さまの 突如とし あり 質問 「梵音響流」ということばを、いつて肥松に変身されたと思ったら、丹 おことばてしたが、 わたしには関の女のひなびた歌にの白毫から放たれる光のすじかも ました。それが「鳴流走響韻」だっ そういえば、 はけ かお 部 秋 1 たの めく短 か聞こえま れません。 経 1) 9 赤 中 ۱ ب すれ。 か 큤

迦 (T) まあそれて、 說 法 配一つ、 というが、 お前の番 の二句はできた。 お前 13 かかっ 5 دنالم あ 深遠な哲学も幽 茲の談 莪 ŧ 雲散 霧消

が。

7 ; ふ

んこの

耳の

俗っぽいせい

tj

のでしょ

うし

翼唱関女歌 関女の歌をうたえ鶯

33

ij. . つ 通 禾 黍 出 リ「関」の女なの 油 来 油 て だり、彼の 71 る حر 爖 **狡童ご我と好** 秋 か、 の句 には、 あるいけまた「閩」の女なのかは からざりぎしがほの 商 0 微子の 1 F 2 沄 大る「 めか かい 萝 しらないが、 秋 へ 歌 もない。 \bigcirc 関 「春秋」 女 *7*)° 7 漸 (7)お 澘

僿

前

9

ね

4

公二十六年に「冬、楚人、宋を伐ち、緡を囲む」とある。この緡は「穀梁伝」の僖公二十三 をすぎた 鶯の声が亡国 の宋だから、 介し、斉・楚・魏がこれをとった。 いつっ春、 わたしが家祖について語るとき関の女が出てきてふしぎではない。夏のなかば **斉侯、宋を伐ち関を囲むしという関のことだ。斉は宋を淑** の 女に似ていてもおかしくない。夜叉王ラーヴァナの霊のさま わが呉国公け、梁郡公だったことがある。 して 、 梁
は
春
秋
時 その 地を三 よう楞

たしには二の句がつげません、 巴童「奇古の結構なことはよくわかりましたが、話がいよいよ奇となり古となり、 さい わい 順番か分いって、先生ですし 無学な

伽の山谷に流れる木魄を聞くようた。

瀑懸楚練帔 楚のしらぎめをかけよ湯つせ

35

图

露満

笑眼

笑つ眼に露満たす風

34

巴童「先生には、やさしいのかもしれませんが、 Γz < お前 むきの・ すらりとやさしい 回 7 楚練被と口なんですから 訞 明 IT いるま

す 17 ば わりぎめ、帔はつろかけ。もっとも裳裾ととってさしつかえはなく、 もっとも妙だ。 わたしは「 十二月楽辞しに「生羅を裁ち、 湘竹を伐り ネ 1) 被门 疎霜玄

い簟は秋玉」とうたった。その六月に間もないからな。 巴童「なるほど。すると次の風露の句は、 巧笑情たり、 美目 的たり、 というところですか